

いじめ防止プログラム開発に向けての基礎的研究

－現存するプログラムの比較分類を通して－

古池 伶美 (佐賀大学)

1. 目的

本研究では、日本国内にあるいじめ防止プログラムの内容や手法を比較・分類することで、現在の国内のいじめ防止プログラムの特徴を明らかにし、今後開発するいじめ防止プログラムに必要な要素を考察することを目的とした。

2. 研究方法

1) 収集方法

CiNii articles (NII 学術情報ナビゲータ) と AMAZON.co.jp を用いて、キーワード「いじめ×プログラム」で検索を行い(2020年8月時点)、検出された50編から分類可能な19編を抽出した。

2) 分類方法

内容に関しては、主な要素を取り出し類似したものをグルーピングしたところ、他者との関係づくりを重視した「人間関係づくり」と、いじめについての直接的な内容を含む「いじめへの対応」の2つの視点にまとめられた。そこから「人間関係づくり」の視点のみが含む「人間関係構築を主とするアプローチ」、「いじめへの対応」の視点のみが含む「直接的いじめ学習を主とするアプローチ」、双方の視点が含まむ「総合的なアプローチ」の3つにプログラムを類型化した。また手法に関しては、各プログラムの教材を取り出し、「ICTの使用の有無」という視点から分類を行った。

3. 結果と考察

1) プログラム内容

「人間関係構築を主とするアプローチ」は5編、「直接的いじめ学習を主とするアプローチ」は9編、「総合的なアプローチ」は5編であった。これら3つに分類できたことから、日本のいじめ防止プログラムは「人間関係づくり」と「いじめへの対応」の2つの視点から開発しているものが多いことが考えられた。しかし、両方の視点を網羅的に行っているものは十分な数とはいえなかった。いじめを防止するには、いじめとは何であるかという「知識」、いじ

めを止めることのできる「人間関係」、実際にいじめを止めるための「いじめへの対応」が必要である。したがって、このうちの視点のいずれかに特化してプログラムを開発していくのではなく、両方の視点を網羅した「総合的なアプローチ」を開発されていくべきだと考えられた。

2) プログラムにおける ICT の活用

ICTを活用している教材が使用されていたプログラムは5編であった。その中で、阿部他(2018)のようなICT教材による「体験的」ないじめ学習に着目した。なぜなら実際のいじめ場面では、様々な状況や要素が複雑に絡まっているため、いじめを見たらまたいじめに遭ったらどういう行動を取るべきかという理想的な対応を教えるだけでは不十分なことが多い。したがってICTを活用することで、実際のいじめ場面を想定し、いじめを止めるシミュレーションができるリアルな「体験」を作ることにより、そのときにどんな行動がとれるのかという当事者意識を持つことができ、実際のいじめを解決できる実践力が育まれることが考えられた。

4. 結論

総じてみると、日本のいじめ防止プログラムは、「人間関係づくり」と「いじめへの対応」に基づいたものが多いが、両方を網羅したものは十分ではなかった。一層いじめ防止に効果を上げるには「総合的なアプローチ」のような両方の視点を網羅したものが必要だと考えられた。また、ICTが活用された教材も見られたが、中でもICTでリアルな体験ができるのは、当事者意識が芽生え、実践的ないじめへの対応が行えるようになると考えられた。

5. 主な参考文献

1) 阿部学・藤川大祐・山本恭輔・谷山大三郎・青山郁子・五十嵐哲也 (2018), 「脱・傍観者の視点を取り入れたいじめ防止授業プログラムの開発—選択と分岐を取り入れた動画教材を用いて—」, コンピュータ&エデュケーション, 45巻, p.67-72